日・韓・中の
英語教育の現状と今後の課題

― 学生ＣＡＮ−ＤＯ/英語教員意識調査より ―

吉田研作（上智大学）渡部良典（秋田大学）根岸雅史（東京外国語大学）
長沼君主（清泉女子大学）㈱ベネッセコーポレーション国際教育事業部

はじめに

本調査は、日本、韓国、中国の東アジア圏３カ国の高校生および教員を対象に行った、生徒の英語能力と自己評価、英語教員の指導方法・内容の関係の調査結果である。目的は単に得点を比較することではない。各国の全高校生が受験したわけではなく、当然受験者層には偏りがあるので、単に得点を比較すること自体にはあまり意味がない。むしろ、各国の教育システム、教育理念、指導法、指導内容、生徒の自己評価などを検討しながら、より普遍的な英語教育上の示唆が得られるのではないかと考えたのである。

本調査は以下の３点を目的とする。

1．３カ国の受験者に共通した傾向を検証する。
2．各国の受験者に異なる傾向を検証する。
3．各国の受験者について、さまざまな要因間の関係を調べる。

1. テスト・生徒用自己評価アンケート・教師用アンケート

本調査では、ベネッセコーポレーションが開発した、英語運用能力を測定するためのテスト、「GTEC for STUDENTS 英語コミュニケーション能力テスト(以下、GTEC for STUDENTS)」を使用した。このテストは日本の主に中学生・高校生レベルの学習者を対象に作成したものであり、リスニング、リーディング、ライティングの部門に分かれている。

受験者自身の自己評価を測定するためには、学校や国内外の様々な状況において英語を使って実際にどのような活動ができるのかを自己申告で答えさせる「CAN-DO 調査」を使用した。また、教師がどのような指導目的・理念のもとに、どのような指導を行っているかを調べるためには、日本の学習指導要領に基づいて作成したアンケートを使った。これは、文部科学省の事業である「『英語が使える日本人』育成のための戦略構想」の一環として全国の実態調査を行うために作成したものを、本調査のために改訂したものである。

2. 調査対象

今回の調査への参加者は**表１**に示した通りである。

表１：調査参加者

	参加校数	生徒								教員
		1年生				2年生				
		男	女	不明	計	男	女	不明	計	
日本	15	1, 448	1, 454	13	2, 915	730	664	54	1, 448	69
韓国	7	811	1, 717	38	2, 566	880	1, 661	26	2, 567	52
中国	4	986	1, 187	3	2, 176	966	1, 091	3	2, 060	20
合計	26	3, 034	4, 241	382	7, 657	2, 412	3, 332	331	6, 075	141

協力を依頼する際には、４年制大学への進学を学校全体としてすすめている高校を基本に、かつ本調査に学年全体で実施協力できる高校を必要条件に、最終的に協力を得られた学校が参加校となっている。

3. GTEC for STUDENTS に見る英語能力基本統計の分析

GTEC for STUDENTS は絶対評価、より正確には目標準拠評価に基づくテストである。**表２**に示されているように、得点を６つの段階に分けて、各段階の英語力が定義されている。[注1]

表２：ＴＯＴＡＬ運用力　グレードの定義

スコア帯	Grade	グレードの意味
610 以上	6	《CAN-DO》英語圏の４年制大学への留学に挑戦できる最低限レベル（680 以上）《技能レベル》３技能のグレード平均６以上
520～609	5	CAN-DO》英語圏の２年制大学への留学に挑戦できる最低限レベル（540 以上）《技能レベル》３技能のグレード平均５以上
440～519	4	CAN-DO》短期の語学留学で英語圏に行き、授業についていくための最低限レベル《技能レベル》３技能のグレード平均４
380～439	3	《CAN-DO》英語圏へのホームステイや海外旅行に行って、英語体験を楽しめる最低限レベル《技能レベル》３技能のグレード平均３
300～379	2	《CAN-DO》英語のネイティブ・スピーカーの先生に積極的に話しかけるなど、経験を積むレベル《技能レベル》３技能のグレード平均２
299 以下	1	CAN-DO》これからの可能性に期待レベル　技能レベル》３技能のグレード平均１

このグレードの定義から、各国の受験者得点がどのような分布を示しているかを見ると、日本はＧ２からＧ４まで、おおよそ中位より下から上までに分布しており、韓国の受験者はＧ１からＧ６まで広く分布している、また中国はＧ３からＧ４と中位から中位上に分布していることが分かった。

表３に GTEC for STUDENTS の総合得点の平均を示し

たが、それぞれ中国 432.6、韓国 414.1、日本 407.8 と中国が最も高い。しかしながら、前述の「グレードの定義」の示す限り、これらの差は各国受験者のレベルが大きくは違わないことを示している。すなわちどの国の受験者の平均点も「グレード３」にあたり、「英語圏へのホームステイや海外旅行に行って、英語体験を楽しめる最低限レベル」である。

表３：各国結果のテスト結果、基本統計

		人数	平均	標準	最高点	最低点	全体平均グレード
合計得点（TOTAL score）	日本	4,236	407.8	88.7	732	78	3
	韓国	5,098	414.1	120.7	768	142	3
	中国	4,225	432.6	77.0	731	200	3

4. 各技能別結果の考察

本節では、リーディング、リスニング、ライティングの３技能に分けて各国の傾向を検証する。**それによると、**総合得点が、韓国の受験者の場合は、主にリーディングとリスニングの得点で占められているのに対し、日本の総合得点はより大きな割合をライティングの得点が占めている。また中国には日本と同様の傾向が見られるが、全体として高い得点となっている。

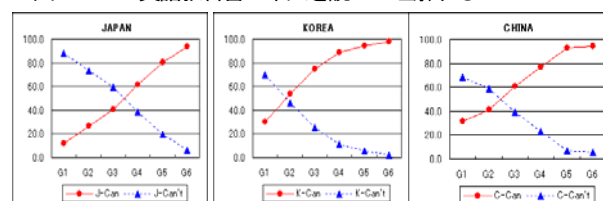
各技能別にもそれぞれ６段階の「グレード」に得点を分けてみてみると、リーディングについては、日本と中国が「グレード４」、韓国は「グレード４」と「グレード５」の境界付近にあたる。リスニングについては、韓国、中国の受験者は「グレード３」であるが、日本の受験者は「グレード２」である。ライティングについては、日本、中国の受験者が「グレード３」にあたり、韓国の受験者は「グレード２」だった。

得点で見ると各国の受験者に顕著な差があるように見受けられるが、実際にその能力を使って何ができるかという規準に照らしてみると、リスニングとライティングについては、各国全体として低いレベルにとどまっている。特に日本の受験者のリスニング、韓国の受験者のライティングが低い。一方、各国の受験者ともにリーディングについては比較的高いレベルにあったと言うことができる。

5. 英語能力テストの結果と受験者の自己評価の関係

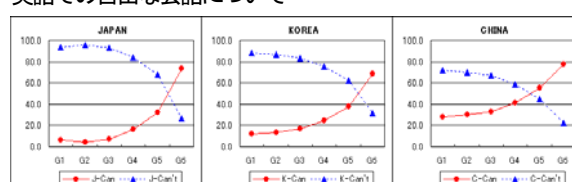
客観的な英語能力と同時に、学生自身が英語を使って自分は何をできると考えているのかを見るために自己評価、すなわち CAN-DO 調査を行った。CAN-DO 調査表は 53 項目からなる質問紙であるが、これらの質問項目は、教室内で行う活動、教室外で行う活動、国外で行う活動と３つのタイプに分けて作成したものである。注2

各項目の結果を図に表すと、どの項目についても３カ国とも似たような傾向を示している。例として「Ｑ２英語教科書の本文を読んで理解する」ができるかどうかに対する回答を図示したものが**図１**である。縦軸は人数のパーセンテージ、横軸は上記 GTEC for STUDENTS のグレードである。また、実線は調査紙の回答選択肢の中で can（できる、ないし、ある程度以上できる）と答えた生徒の回答率、点線は can't（できない、ないし、できる程度が限られている）と答えた生徒の比率である。

図１：Ｑ２英語教科書の本文を読んで理解する

注：質問2）英語教科書の本文を読んで理解する
1. 授業で習ったところなら、読んで意味を理解できるところがある。
2. 授業で習ったところなら、ほとんど読んで意味を理解できるが、習っていないところは理解できない。
3. 授業で習っていないところでも、読んで意味を理解できるところがある。
4. 授業で習っていないところでも、ほとんど読んで意味を理解できる。

当然のことながら、Ｇ１からＧ６にグレードが上がるにつれ「できる」と答えている受験者の数が増え、逆に「できない」という回答数が減っている。日本の受験者は、「できる」と「できない」と答えた生徒の割合が逆転するグレードがほかの２カ国に比べて高い（他の国に比べて、GTEC for STUDENTS の得点が高くならないと「できる」と答える人の数が「できない」と答えている人の数より多くならない）、概ね各国受験者ともに同様の傾向を示している。

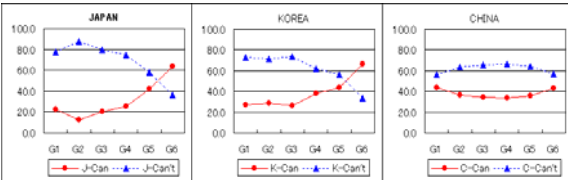
しかしながら、さらに考察を進めると、このようなパターンにも項目によって違いがあることがわかる。たとえば、上記「Ｑ６授業時間外で、英語のネイティブ・スピーカーの先生との、英語での自由な会話ができる」（**図２**）の結果である。

図２：Ｑ６授業時間外で英語のネイティブ・スピーカーの先生との英語での自由な会話について

注：質問6）授業時間外で、英語のネイティブ・スピーカーの先生との、英語での自由な会話について

1. 1対1でも、あいさつぐらいはできる。
2. 1対1で、自分に興味のある話題なら、なんとか話せることがある。
3. 1対1で、自分に興味のある話題なら、大体話せる。
4. 1対1で、どのような話題についてでも、なんとか話せる

これも３カ国で同じような傾向を示しているが、先の質問に比べると、「できる」と「できない」との割合の逆転がよりグレード６に近いところで生じている。すなわち、授業時間外で、英語のネイティブ・スピーカーの先生と英語での自由な会話ができるかどうかということについては、最も高いグレード６にならないとできるという自信が持てないことを示している。

このような各国共通の傾向が認められる一方で、また各国の受験者によって異なる傾向も認められる。特に顕著なのが中国の受験者である。**図３**はその典型的な傾向を示したものである。

図３：Q35 テレビ・ラジオでの英語音声のニュース

注：質問35）テレビ・ラジオでの英語音声のニュース
1. 聞いたことがない。
2. どのようなトピックについて話しているのかはわかる。
3. それぞれのトピックについてどのようなことが言われているか、大まかにはつかめる。
4. それぞれのトピックについてどのようなことが言われているか、細かい部分まで理解できる。

※1「聞いたことがない」は分析の対象からはずしてある。

図表が示す通り、日本と韓国においてはグレード１からグレード６に至るまで漸次「できない（can't）」の数が減り、「できる（can）」の数が増えるという傾向を示している。一方中国の受験者の場合、グレード１から６に至るまで、すべてのグレードにおいて「できない（can't）」が「できる（can）」を上回っている。これは一つには中国の受験者が、英語力テストで測定された能力にかかわらず、この項目の活動に関して自信をもっていないということを示している。これはやや異質な傾向ではあるが、必ずしも中国の受験者のみに見られるのではなく、質問項目の内容によっては、日本や韓国でも同様の傾向が認められる。

以上、受験者が自分でどのような言語活動ができると評価しているかを検討してきた。しかし、その結果について学習者が実際に経験したことのある項目に対する評価と、経験したことのない評価は異なるのではという疑問が沸くかもしれない。これについては今後調査を行わなければならないが、今回は各国の受験者が実際にどの項目をどれだけ経験したことがあるかを尋ねた結果を以下に示しておきたい（**表４**）。これを見る限り、日本の高校生は他の国の高校生と比べて、実際に授業以外で英語に触れる機会が少ないことが分かる。これは、上記で見た、英語を使うことに対する自信の低さと関係している可能性がある。

表４：CAN-DO 項目について経験があるか否か（経験率%）

	日本	韓国	中国	
Q23	92.7	89.0	86.5	英語での自己紹介
Q24	23.6	65.6	49.4	英語での電話
Q25	34.0	64.4	56.7	英語での説明（例えば、英語で道をたずねられたり、切符の買い方をたずねられたとき）
Q26	81.6	90.1	82.2	自分の好きな洋楽アーティスト（歌手、音楽グループ）の英語の歌
Q27	37.6	77.4	62.9	英語で書かれたインターネットのホームページ
Q28	16.5	42.6	38.3	英語で書かれた「レシピ」（料理の作り方）
Q29	45.5	77.9	77.0	教科書以外で、自分から進んで読む英語の本
Q30	22.1	62.3	60.3	英字新聞
Q31	28.1	56.8	42.6	英語での電子メールや手紙を受け取ったとき
Q32	40.2	77.1	74.9	英語で書かれた説明書（例えば、電気製品などの取扱説明書や薬の飲み方）
Q33	20.4	55.5	59.7	英語の天気予報
Q35	37.8	72.0	74.5	テレビ・ラジオでの英語音声のニュース
Q36	83.6	87.7	80.4	英語音声の映画・ビデオ・DVD
Q37	44.5	59.5	76.7	英語で書くはがきやカード
Q38	40.6	72.7	73.6	英語で書く日記
Q39	31.3	55.5	51.3	英語で書く電子メールや手紙
Q43	32.9	49.9	46.3	英語圏での学校の授業
Q44	26.0	57.3	54.3	英語圏での学校の教科書
Q45	24.2	40.7	46.5	英語圏での学校の授業のノート
Q46	48.6	68.6	59.3	ホテルでの英語のやりとり（例えば、英語で自分の行きたい場所や知りたい情報をたずねるとき）
Q47	85.4	79.3	58.2	英語圏での服などの買い物
Q48	57.0	47.3	52.0	英語圏の人たちへの日本文化の紹介
Q49	43.7	48.8	53.2	英語圏での（ホーム）パーティーでの会話
Q50	78.2	78.1	56.9	英語圏でのファースト・フード店
Q51	31.7	41.7	49.4	英語圏の郵便局や両替所
Q52	87.0	81.9	64.2	街の掲示や案内
Q53	64.1	72.9	55.1	英語圏での公共の乗り物（電車やバス）のアナウンス

※経験率は全有効回答(ALL)を使用

6. 教員アンケート調査

最後に教員アンケートの調査結果について考察する。

表５：教員アンケート回答者　研修歴　過去５年間の英語教員研修受講経験

	日本	韓国	中国	合計
%	40.6	80.8	89.5	62.6
あり	28	42	17	87
なし	41	10	2	53
無回答			1	
Total	69	52	20	140

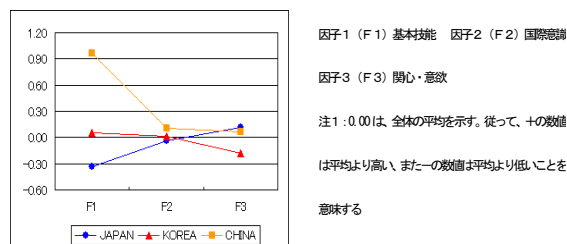
どの国も回答者も平均年齢は30代であり、教員歴も14年から16年であった。すなわち各学校で中心として指導にあたっている教員といえるかもしれない。なお、教員研修については、表５にある通り、日本では「ある」と答えたのが28名（40.6%）、韓国が42名（80.8%）、中国が

17 名（89.5%）であった。昨年度から日本でも 60000 人研修が始まったが、教員研修参加率の違いは気になるところである。

教員向けのアンケートは日本の学習指導要領が実際に教員にどのように受け取られているのか、どの程度実施されているのかを調査するために作成したものであるが、事前に韓国、および中国の指導要領を調べたところ、３国とも、それほど大きく違わないということがわかったので、それぞれの国に合わせて用語を変えた以外は、そのまま訳して使った。教員アンケートは大きく分けて教員の英語教育に対する理念的側面、指導内容、教える際に特に配慮していることの３つに分けられている。

6-1. 英語教育の目的･理念について

教員の英語教育に対する理念的側面に関しては、各国間に大きな特徴が認められる。因子分析の手法を使って共通性の高い項目をグループ化し、３つの因子に整理し、これらをまとめた傾向を示したのが**図４**である。

図４：英語教育の理念・目的に関する因子の各国比較

この図の示すところ、３カ国の間で、特に第１因子（Ｆ１）「基本技能」において差が見られた。すなわち「中学校卒業時には、だれでも英語で挨拶をはじめとする簡単な日常会話ができなければならない」、「高校卒業時には、だれでも日常的な簡単な話題について英語で読んだり書いたりできなければならない」などの項目については、中国の教員が最も高い値であり、次いで韓国、最も低いのが日本である。総じて、これを最低限の目標とするという傾向が中国の教員の間に顕著であることを示している。

第２因子（Ｆ２）「国際意識」は、「英語を使って英語圏の人とより親密な交流を持つよう指導することは重要である」、「英語を国際的な場面で実践的に使えるように指導することは重要である」などを含み、日韓中の間に殆ど違いが見られなかった。

また、第３因子（Ｆ３）「関心・意欲」は、「生徒が英語を使って積極的にコミュニケーションしたいと思う気持ちを育てるような指導をすることは重要である」、「生徒が英語を好きになるように指導することは重要である」などの項目が含まれ、韓国の教員よりも中国および日本の教員の方が多少強く意識していることがうかがえる。

7-2. 英語教育の指導内容について

次に、指導内容についてみてみよう。**図５**は、「主に、聞くことと話すことを指導している時、重点を置くこと」について見たものである。

図５：主に、「聞くこと」と「話すこと」を指導している時、重点を置くこと、に関する因子の各国比較

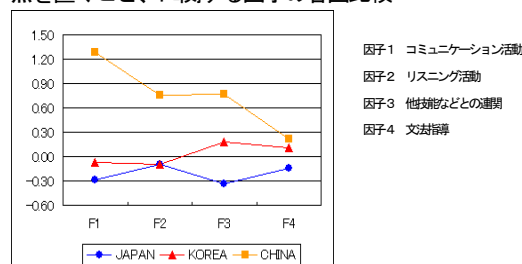



図 12 から、中国については、概ねどの因子についても、日本および韓国よりも高い値を示している。中でも、「コミュニケーション活動」（第１因子）において最も実施率が高く、次に「リスニング活動」（第２因子）、「他技能などとの関連」（第３因子）、そして最も値の低いのが「文法指導」（第４因子）である。一方韓国については、「他技能などとの関連」（第３因子）、「文法指導」（第４因子）について比較的高い値である。日本はその因子の値も低いが、特に第１因子（Ｆ１）の「コミュニケーション活動」と第 3 因子（Ｆ３）「他技能などとの関連」が特に低いことが分かる。これら指導方法、生徒の英語得点、自己評価の関係については明確なことは言えないが、英語力向上には、「コミュニケーション活動」、「他技能などとの関連」などが重要な要因となるだろうことを考えると、日本の傾向は気になる結果である。

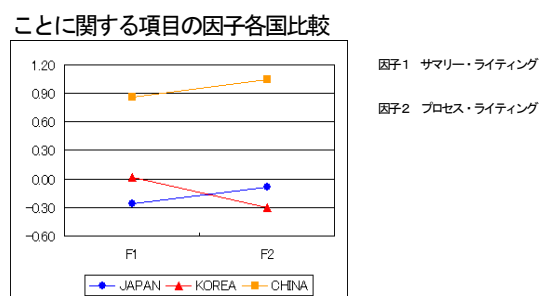
表６　因子間の相関

	因子 1	因子 2	因子 3	
因子 1	－			
因子 2	0.62	－		
因子 3	0.65	0.52	－	
因子 4	0.36	0.31	0.50	－

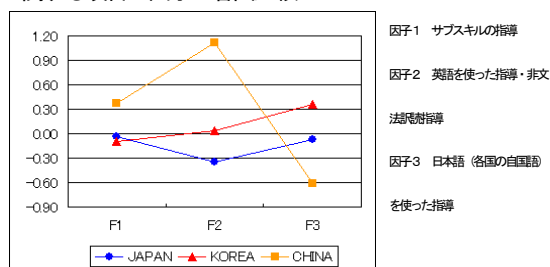
さらに因子間の相関（**表６**）を見ると、第１因子と第４因子、第２因子と第４因子の係数が非常に低い（r＝.36, r＝.31）。すなわち、コミュニケーション活動に重点をおいた指導、およびリスニング活動に重点をおいた指導、これらの指導方法と文法指導との間には密接な関係が見られない。中国の受験者の得点は特に、リスニングとリー

ディングに関して非常に高かったが、それは教員がコミュニケーション活動およびリスニング活動などに重点をおいて指導しているからである、ということも考えられる。

次に、主に、「書くこと」を教えている時、重点を置くことである（**図６**）。これらの項目については、「サマリー・ライティング」、「プロセス・ライティング」という２つの因子に分かれる。サマリー・ライティングとは、例えば、「読んだ内容について、自分の考えなどを整理して書かせる」などの項目が含まれている。一方、プロセス・ライティングには、「より適切な構成や言語形式で書けるように、書き直しなどを含めて書く過程を重視した指導をする」などが含まれている。

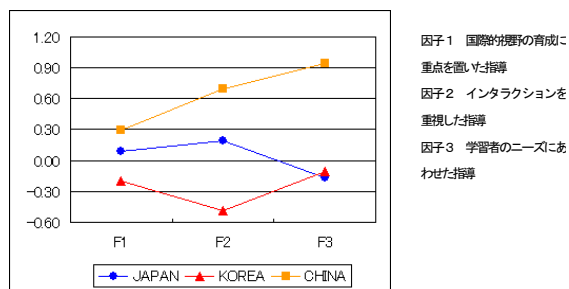
図６：主に、「書くこと」を教えている時、重点を置くことに関する項目の因子各国比較

中国の教員については、プロセスを重視したライティング指導を行っているとの回答率が、サマリー重視の指導よりもやや高い。また、韓国ではサマリーなどを書かせることに重点を置いて指導しているのに対し、日本では書くプロセスに重点を置きながら指導しているとする回答傾向がうかがわれる。このようなプロセス重視のライティング指導が今回のライティング・テストの採点基準に合致しており、それが高い得点に結びついたという可能性も否定できない。一方、サマリー・ライティングは内容を重視するライティング活動なので、誤りや文章構成はあまり気にせずに書くことにつながり、それが韓国受験者の得点の低さに現れた可能性もあるが、これについては今後の調査を待たなければならない。

次に、主に読むことに関する指導については、「サブスキルの指導」、「英語を使った指導／非文法訳読指導」、「日本語（各国の自国語）を使った指導」の３つの因子に分けられる（**図７**）。第１因子（サブスキルの指導）には「文章の中でポイントとなる語句や文、段落の構成や展開などに注意して読ませる」、「目的や状況に応じて、速読や精読など、適切な読み方をさせる」などが含まれ、第２因子には「読んだ内容について、書き手の意向（考え、意見、気持ち、感情など）を理解し、自分の考え、感想などを英語でまとめさせる」などの項目が含まれる。

図７：主に、「読むこと」を教えている時、重点を置くことに関する項目の因子の各国比較

読む指導については、日本と韓国に大きな差は見られないものの、中国については、特に第２因子「英語を使った指導／非文法訳読指導」について高い値を示している。また第３因子「日本語（各国の自国語）を使った指導」については、逆に中国教員について低い値となっている。

7-3. 指導の際に配慮していることについて

最後に、指導の際に配慮している点に関する項目を検討する（**図８**）。

図８　教え方、内容の扱い方に関する因子の比較

因子分析の結果、「国際的視野の育成に重点を置いた指導」（第１因子）、「インタラクションを重視した指導」（第２因子）、「学習者のニーズにあわせた指導」（第３因子）の３つの因子に分けられることがわかった。いずれにおいても中国の教員が高い率を示しているが、日本の教員の方が韓国の教員より、国際的視野の育成に重点を置いて指導しており（第１因子）、また「インタラクションを重視して指導している」（第２因子）においても高い値を示している。第１因子には、「世界や我が国の生活や文化についての理解を深めさせるとともに、言語や文化に対する関心を高めさせ、これらを尊重する態度を育む」などが含まれている。また、第２因子には「ネイティブ・スピーカーなどの協力を得て行う授業を積極的に取り入れる」などの項目が含まれている。

第３因子の学習者のニーズに応じた指導については日本と韓国の教員が重視する程度に比べ、中国の教員が重視している度合いが目立って高い。つまり、「家庭生活や学校生活の中で生徒の興味・関心の対象となる日常的で身近な話題を取り上げる」などについては、中国の教員が他国に比べ強く意識しているようである。この傾向は先に**図４**で見た、「基本技能」に関する結果と同様の傾向を示しているように思われる。すなわち、あくまで生徒のニーズにあわせ、基本に忠実に指導を進めるという指導態度が、この結果に現れているということもいえるかもしれない。

結論

最後に、冒頭で挙げた本調査の３つの目的に従って、概要をまとめる。

１．３カ国に共通した傾向

- GTEC for STUDENTS で測定された英語総合得点（TOTAL スコア）について、３カ国の平均点には違いが見られた。しかしながら、ベネッセコーポレーションで設定した基準・規準（グレードの定義）による差はほとんどない。したがって、英語を各国の自国語としない東アジア圏の高校生の平均到達レベルはさほど大きな違いはない、ということになる。
- 自己評価の項目（CAN-DO 調査）について、概ね、グレードが上がるほど「できる」という回答が多くなり、「できない」という回答が少なくなる。
- 授業時間外で、英語のネイティブ・スピーカーの先生との、英語での自由な会話ができるかということについては、どの国の受験者もグレード６で初めて自信を持ってできると答えている。
- どの国の教員も「国際意識を育む」、「学習者の関心、意欲を考慮する」などに留意して指導している。

２．各国で異なる傾向

- TOTAL スコアでは大きな差は見られないものの、それを構成する下位技能については各国の受験者間で異なる。中国の受験者は全体としてバランスの取れた能力であり、韓国の受験者はリーディングとリスニングが高い割合を占め、日本の受験者は相対的にライティング能力が優れている。
- 自己評価（CAN-DO 調査）について、中国の受験者は低いグレードと高いグレードの間に日本と韓国の受験者ほどの差がない。
- 日本の受験者は全体的に自分の英語力を過小評価する傾向にある。
- 基本的な到達目標については、中国の教員の意識が最も高かった。

３．各国受験者に関するさまざまな要因間の関係

- 自己評価と GTEC for STUDENTS に代表されるような客観テストの関係は必ずしも一致しない。本当の英語力が何であるかについては更に研究が必要である。

特に上述最後の点などを含めて、この調査だけからでは、指導法、学生の自己評価、実際の英語運用能力、これらが直接どのような関係にあるかは詳しくはわからない。今後は、今回収集したデータをさらに分析し、また、授業観察、面接調査などを行いさまざまな角度から英語力と自己評価、指導の関係を見直す必要がある。このような調査を進めることにより、一国の中だけで見ていてはわからないことがわかると思うのである。単に得点を競い合うのではなく、よりよき指導を行えるよう互いに協調しながらさらに調査を進めるべきであろうと考える。

注１…技能別の習熟度ガイドライン（グレードの定義）は、各技能テストの項目分析を経て作成したものである。具体的には、どのような困難度（difficulty）を備えた項目で、どのぐらいの能力をもった受験者層を識別している項目かという情報と、それら個々のテスト項目が、テスト内容としてどのような能力を測定しているものかという情報をつきあわせて分析し、このぐらいの能力帯（スコア帯）を代表している能力の特徴は何かを GTEC for STUDENTS のテスト内容に即して記述しなおしたものが現状の技能（RLW）別の習熟度ガイドライン（グレードの定義）である。一方、３技能のスコアを束ねた TOTAL スコア帯に対応した「グレード」および「グレードの定義」は、３技能のグレード別スコア帯を合計して区切りとしたものであり、その定義については、従前の CAN-DO 調査に基づく各技能グレード別「CAN-DO statement」を根拠に意味づけた description である

注２…本節では、CAN-DO アンケートの全項目に回答している受験者を対象に分析を行っている。テスト受験者のうち、少数ではあるがアンケートに回答していなかったり、途中の項目に未回答の受験者がいたが、それらは対象から外した。